

## 学外教育機関及び施設と連携した 文理融合型実践教育プログラムの構築と実施

梶井龍太郎\*ほか全教養学部専任教員

### はじめに

東海大学教養学部では、文部科学省平成21年度「大学教育・学生支援推進事業」（教育GP）に学部独自の教育プログラムである「SOHUM」プログラムを応募し採択された。

“SOHUM（ソヒューム）”とは、ソーシャル・ヒューマンウェアの略であり、これを『社会的な広い視野と自身の専門を生かした視点を併せ持ち、状況を理解して社会の変化に柔軟に対応し、問題解決に向けて自らの社会的役割を自覚し行動できる能力』と定義して、「SOHUMプログラム」がめざす人材育成目標としている。本教育計画は、この「SOHUMプログラム」を推進するための補助的役割を果たすための計画である。すなわち、GP補助金では賄えない費用を想定した教育予算として計画された。

### 「SOHUMプログラム」事業計画

2009年度の「SOHUMプログラム」の事業計画では、（1）SOHUM プラザ開設準備（2）SOHUM プログラム広報用のホームページ開設とパンフレット類の作成（3）5パイロットプロジェクトの準備（4）「SOHUM カルテ」システム導入の準備（5）公開講座と公開シンポジウムの開催 の5つの計画が立案された。

### 事業計画に対する実績の報告

2009年度事業計画に対する実績は以下の通りである。

（1）「SOHUM プラザ」の開設については、湘南校舎13号館4階に開設し、会議・ミーティング・展示発表を行い、学生の相談窓口となる学部総合センターの機能を担うという、SOHUMプログラムの実践において欠かすことのできないプロジェクトの拠点としての準備を整えた。この「SOHUM プラザ」の開設により学生、教員に対して本取組を周知することが

できた。また、SOHUM プラザに SOHUM プログラム専従職員を配置し、本プログラムが円滑に運営されるための事務全般に対しての補助作業（ホームページ作成と管理作業、公開講座、シンポジウムの準備、「SOHUM カルテ」のシステム導入準備、本事業の会計補助業務）を行うことで、学部総合センターの機能を担う体制が整った。

（２）プログラム専用のホームページを開設し公開した。また、SOHUM プログラムの紹介、進行状況報告等のポスター、パンフレットを作成して学内外の関係各部署、高等学校等に送付し、学内外に対して本取組を広く紹介した。

（３）実践的教育プログラム（プロジェクト）の準備のため、以下のような学内外の提携団体とプロジェクト活動に関する打ち合わせ、実施場所の現地視察を行った。「湘南地域ブランド創造プロジェクト」は、茅ヶ崎市の NPO 団体である湘南スタイル（まちづくり市民団体）と協議を重ね、茅ヶ崎市長とも協同して地域起こしのための平成22年度の活動について学生と教員がどのような形で参画するかを具体案を作成した。「北東アジア環境共生プロジェクト」では、上海で中国の都市開発の現地視察および発展と環境に対する問題意識の差についての意見交換を行い、ソウルでは、エコ活動や環境デザインの現場を視察し、その取り組みを北東アジアの各地域（上海・ソウル・平塚）に適用するためのアイディアについて講義を受けた。さらに国民大学における環境教育プログラム（ECO-campus, Green-Warrior, Campus-recycle）など、具体的なエコ・プロジェクトについての講義を受け、そうした取り組みの共同実践について議論・検討した。「八重山諸島共生社会プロジェクト」では、沖縄本島、石垣島、西表島、波照間島で事前視察・調査を行った。沖縄本島で、博物館や平和祈念公園などの展示内容の視察・調査や生物調査の可能な場所の選定などを行ったほか、八重山諸島（石垣島、西表島、波照間島）では、博物館（石垣市）やダム（国土交通省）、自然保護センター（環境省）の視察・調査や島内の生活・産業（農業、観光）の状況把握、沖縄の補助金による行政・事業の状況視察、生物調査の可能な場所の選定などを行った。「医療・福祉における芸術療法プロジェクト」では、音楽療法で使用する楽器を検討・購入し、専門外の学生の参加方法の開発研究を行った。また、造形療法の観点からは実際に学生を参加させて老人用玩具を作成し、プロジェクト報告会で展示した。「メキシコ文化と自己形成プロジェクト」では、提携先の鳥取大学と協議を重ねた上で、鳥取大学の海外活動拠点であるメキシコのラパスを視察し、現地の教育研究機関である UABUS や CIBNOR とも協議して学生参加プログラムの準備を進めた。また、これらの当初より計画されていた5つのプロジェクトのほかに、「秦野の森の物語」「湘南里川」「多文化こども」「ルワンダ孤児救援」「トルコを通じて学ぶ異文化理解」の5つのプロジェクトが新たに計画され、活動のための準備をはじめている。

（４）「SOHUM カルテ」システムを導入し、平成22年度本稼働のための試行を行った。「SOHUM カルテ」は本教育プログラムにとって最も重要なツールとなるもので、「SOHUM カルテ」の構築によって、プログラムの学習成果は、常に教員と学生が双方向的にチェックすることができるようになった。「SOHUM カルテ」を用いてチェックすることで、成績評価に対する担保が保証され、来年度以降学内外に向けてもこのようなラーニングアウトカム型のシステムが充分機能することを証明することが可能となった。

(5) 3月14日に湘南校舎8号館において、5つのプロジェクト毎に講師や関係者を招いて公開講座を実施した。ここでは、同時にプロジェクト毎に活動状況、活動計画に関する展示発表を行った。当日は教養学部教職員全員（他の業務に関わっている教員を除く）、学部学生（約100名）、外部からの参加者（約150名）があり、プロジェクトに対する理解と参加意欲、意識を高めることができた。また、これらのイベントを通じて学内外に本取組を紹介することができた。また、同日に湘南校舎8号館においてシンポジウムを開催した。基調講演には「途上国発のブランド」開発で多くの若者の支持を得ている（株）マザーハウス代表兼デザイナーの山口絵理子氏を招いた。シンポジウムでは、学部長とSOHUMプロジェクトの担当教員によるグループディスカッションを行った。公開講座と同じ日程、同じ会場で実施したことの相乗効果により（シンポジウムのメイン会場である大教室の周囲の教室に各プロジェクトの公開講座会場を設営した。）多くの参加者があり、学生のプロジェクトに対する理解と参加意欲、教員の意識を高めることができた。また、シンポジウム開催に当たり、学内外で積極的に広報することで、本取組を広く紹介することができた。

## 事業計画に対する成果

2009年度事業計画に対する成果は以下の通りである。

(1) SOHUM プログラムに関わる会議・ミーティング・展示発表を行う場である、「SOHUM プラザ」の開設により、学生、教員に対して本取組を周知することができた。また、SOHUM プラザにSOHUM プログラム専任職員が配置されたことで、学生の相談窓口が常にかかっていることとなり、学生・教員のためのサポート体制が整った。

(2) プログラム専用のホームページを開設し公開したことにより、学生、教職員のプログラムに対する理解が深まった。また、SOHUM プログラムの紹介、進行状況報告等のためのポスター、パンフレットを作成して学内外の関係各部署、高等学校等に送付し、学内外に対して本取組を広く紹介したことで、学生、教職員のプログラムに対する参加意欲が高まった。

(3) 実践的教育プログラム（プロジェクト）の準備のために、学内外の提携団体とのプロジェクト活動に関する打ち合わせ、実施場所の現地視察等を行ったことで、教員の社会的責任の自覚が喚起され、学生は学外の組織や人と協同で作業を進めていくことを通して、自らの役割を理解し、社会から求められる能力とは何であるのかを会得することができた。

(4) 「SOHUM カルテ」システムを導入し、平成22年度より本稼働することで、プログラムの学習成果は、常に教員と学生が双方向的にチェックすることができるようになった。「SOHUM カルテ」を用いてチェックすることで、学生にとっては成績評価に対する担保が保証され、教員の成績評価に対する意識改革も進むことが期待される。また、学内外に向けてこのようなラーニングアウトカム型のシステムが充分機能することを証明することが可能となった。

(5) プロジェクト毎に講師や関係者を招いて公開講座を実施することで、学生、教員にプロジェクトを進める連帯感が生まれた。また、教養学部の多くの教職員、学生が参加したこと

